

今の子どもたちは、よく「夢はありますか。夢は何ですか」「目標をもちなさい。目標は何ですか」などと聞かれるので、大変である。まるで、夢や目標がないのがわるいような勢いである。

日本の子どもたちは、諸外国の子どもたちと比べて自己肯定感が低いと言われる。各種データもそのことを裏付けている。これは、日本人全体にも言えることなのだろう。

将来の夢や目標をもっている子どもが減少しているというデータもある。このこと自体はよくないことだと捉えるのが一般的だろう。しかしである。コロナ禍にあり、様々な行事等がなくなり、本来会うことができる人や本来訪問することができる場所との往来が制限されている。加えて10～20年の間に、現在の職業の約半数がなくなるかもしれないといった予測がある。夢や目標をもちなさいと言われても無理がある。この状況で、夢や目標をもてるとしたら、余程の気持ちの強さをもっているか楽道家だろう。

もしかしたら、夢や目標をもたないことが正解なのかもしれない。子どもたちは、夢や目標をもたないことで、現代社会に適応しているのかもしれない。大人の考えのほうが、適応できていないのかもしれない。大人が言うことは正しいと思われがちだが、これからはそうとも言えない。そもそも大人が現代社会に適応できているのかという問題がある。

学校という閉ざされた社会に生きる教員は危険である。親の次に子どもたちの傍にいるのである。夢や目標をもたせようとする立場の人間である。今までの考え方では、もはや通用しない。

では、どうするか。大人が、教員が、もっている答えが正解だとは限らない。誰も正解はわからないけれども、子どもと大人と一緒に考えることが大事なのではなかろうか。子どもは自己決定力のない未熟な存在ではない。正解ではなく最適解を探すのである。

子どもが大切だからこそ、大人が正しいと思うことを言ってしまうがちである。もちろん、大人の経験が役立つ場面もたくさんある。だが、必ずしも大人の考えや価値観が今後も正解で在り続けるとは限らない。子どもは未熟ではないという視点で、子どもの意見に耳を傾け、対話してみるのが大切なのではなかろうか。

夢は、ないよりはあったほうがよい。とはいえ、夢がないからといって生きていけないわけではない。なくても生きていける。一方、目標は、やはりあったほうがよいように思う。目標を失うというのは、こわいような気がする。だからといって、生きていけないわけではない。

将来の見通しが立ちにくい現代社会において、失ってはいけないものは希望ではないか。どんなに予測不能とは言っても希望を失ってはいけない。希望があれば、何とかやっていけるはずである。